商人の町として知られる茨城県石岡市。
町の通りには、「看板建築」という西洋風の建物が２０軒ほど立ち並びます。町は昭和４年大火に見舞われ、その復興に伴う道路拡幅のために軒先を削った「看板建築」が採用されました。当時の佇（たたず）まいそのままに残る履物店では、８０歳女性の手仕事の技が息づいています。そして女性３代で守り継いできた理容店。復興を手がけた左官職人の孫も、その仕事を継いでいます。町の誇り、看板建築に込めた思いに触れる旅です。

旅の見どころ **1**

明治時代から続く履物店

昭和４年の石岡大火の後、中町通りで最初に再建された看板建築「十七屋履物店」。復興のシンボルと呼ばれました。建物中央にある白い飾りは、下駄（げた）に使う材料、桐（きり）の花をイメージしたものだといいます。４代目店主・宮内ゆうさん（８０）は、昭和３２年、２４歳で嫁いで以来、この店を守ってきました。１００種類近くの下駄、雪駄（せった）の並ぶ店は、ともに店を切り盛りし、８年前に亡くなった夫との思い出が詰まっています。

旅の見どころ **2**

“西洋床屋”と呼ばれた店

街で最も古い看板建築のひとつ。築８６年、女性３代で守り継がれてきた「平松理容店」。西洋風のハイカラな外壁や、古代ギリシャ風のアカンサスの葉をあしらった飾りなど、当時の流行を取り入れたデザインから「西洋床屋」と呼ばれ地元の人たちから愛されてきました。現在店を切り盛りするのは３代目の平松美代子さん（６２）。初代店主の平松志さんは、戦争で夫と２人の息子を兵隊にとられ、店をひとりで守りました。その代わりに「女は手に職を持たなければならない」という教えを胸に今日も店に立ちます。

旅の見どころ **3**

看板建築を手がけた職人の家

石岡大火の後、次々に建てられた看板建築。街の復興を担った中心は、全国から集まった左官職人たちでした。職人たちの中心となり、看板建築の多くを手がけたのが石岡の左官職人・土屋辰之助です。辰之助は昭和６年、大火で焼けた自宅も看板建築として建て直しました。しかし、東日本大震災で外壁の至る所に亀裂が入りました。辰之助の孫で３代目の左官職人・一毛芳昭さん（５５）は、仕事のかたわら、傷ついた外壁の補修作業を行っています。

～こころのふるさとをみつめて～

コブック　vol. １２８

たいせつな看板
～茨城県　石岡市～

２０１４年１月１２日（日）放送

茨城県　石岡市　Map

小さな旅　ホームページ
http://nhk.jp/kotabi

memo

アクセス方法
＜電車＞
東京方面から：
ＪＲ常磐線（特急ひたち）→石岡駅（約１時間）
水戸方面から：
ＪＲ常磐線（特急ひたち）→石岡駅（約２０分）

＜車＞
東京方面から：
常磐自動車道（水戸方面へ）→千代田石岡ＩＣ→石岡市
（東京から約１時間）
水戸方面から：
常磐自動車道（東京方面へ）→千代田石岡ＩＣ→石岡市
（水戸から約２０分）